

メ」は一冊出る毎に購ふて、批圖で眞黒にしたものである。十五六の彼は、坊間賣つて居る福澤の寫眞の裏に「君コソハ我畏友ナリ」と書いて居た。彼の家塾の課外讀本には福澤の文があつた。彼が雜誌には「文字の教を讀む」と題して特に福澤の文を論じた。「文字の教」は明治の初年に福澤の書いた初學讀本である。兄が此論文を書く爲に、熊次は東京中の古本屋を漁りあるいて漸く其一冊を求めたものである。一時東京日々の論壇に據つて彼の論敵であつた碌堂居士が、肥後でなくては書けぬ、と折紙をつけた論文であつた。兄弟の父はまた福翁百話の愛讀者で、新報に出るかつかつ日々丹念に切つては古雜誌に貼つたものである。然し機縁は其子と其子の「畏友」を筆陣の間に相見えしめねば止まなかつた。K新聞の反駁に對して、福翁は努めて答の矢を放つた。それは最後の努力であつた。やがて福翁の計が傳はつた。寅一は圖らず先覺の「畏友」の爲に引導をわたす役をつとめさせられたやうなものである。論戰は大分世間の興味を暖つた。智慧と意氣の間に、團扇は好み好みにあげられた。寅一の反駁が新聞に出た朝、讀んで感激した熊次は、直ぐ一翰を飛ばさず居れなかつた。

「海舟先生も必地下に笑を含むべく候。

私を捨て、公に殉し、先後する所を知らしむ。世教に裨するの大文字、豈海舟先生の爲に辯ずるのみならんや。」

使が歸ると、追つかけて兄の使が越後から到來といふ珍らしい大蟹の茹でたのを齎らした。來客で、後程席畫を描かすが、見に来ないか、と書き添へてある。あまり長いので使を如何したものかと駒子がつつおいつ思案にくれた程使を待たせて、熊次は苦吟の一首を酬ふた。

越の海の 心の いかに深ければ

さすかに かにの そたつなるらん

往つて見ると、三人の客の二人は郷里の熊本からで、若い方の一人は熊次も面識の田子さんであつた。少年時代熊本目貫の洗馬の橋を渡つて向ふ角の文林堂といふ大きな文房具店で熊次は時折筆を買つた。でつぶり太つて眼鏡を光らした其處の主翁を、押柄で少し恐い人に熊次は思ふたものである。田子さんは其次男であつた。早くから時計工を修業し、父兄の二階で開いた店は追々繁昌して獨立の店を張るまでになつた。熊次がまだ社に日勤して居た頃、田子さんが上京すると、社の枋原君などが「開業以來餘十年、澤山儲出云云」と詩でからかつた。其後熊